

港区サードプレイス事業「エルカフェ」（こどもの居場所づくり）について 大阪市港区役所

1. 事業の背景

(1) 港区独自の取組み

区役所がまちづくりを総合的に担うという新しい市政改革により、区長の裁量が大幅に拡充し、港区では「子どもの学ぶ力・生きる力の育成」をめざして、次の2つの観点に立って事業を推進している。

課題を抱える子どもや家庭を支援

① スクールソーシャルワーカー巡回・派遣事業（H25～）

福祉的な課題等の問題をかかえる児童生徒及びその家庭への支援を充実し、教職員の負担を軽減することにより学校教育を充実するために、平成25年度から区専属のスクールソーシャルワーカーを配置。

※平成26年度の実績：相談ケース62件（内好転ケース54件）、1,053時間

② 中1ギャップ問題の解決に向けたパイロット事業（H26～）

ア. 別室登校等サポート事業

・不登校及び不登校傾向のある児童に小学校から中学校まで継続的に登校の付き添いや別室登校等の支援をするサポーターを配置

※平成26年度の実績：登録サポーター9人、357時間

イ. 家庭学習の習慣づくり

・『家庭学習の手引き』を作成し、区内小中学校の全保護者に配布し、講習会等を開催して、学力に相関の高い生活・学習習慣の改善を図る。

（資料参照）

区の特性や強みを活かす

① こどもサイエンスカフェ事業（H25～）

・区内の教育資源（海遊館、中央体育館、八幡屋公園等）と連携し、科学者・技術者等と気軽にカフェ感覚で触れ合い、楽しく科学を学ぶ機会を提供。

② 絵本による読書活動促進スタートアップ事業（H25～）

・区内の絵本ボランティアと協働し、参加者が自由に選んだ絵本を小グループで相互に読み合うなど絵本を通して交流する「絵本ひろば」を学校等で開催。

③ 英語大すき！わくわく体験・ドキドキ交流事業（H26～）

・小・中学生を対象として、日常生活に必要な生きた英語の実体験を通して英語力の向上と多文化共生の理解力を育む。

(2) 取組みから見えてきた課題

① 地域での日常的な見守りや支援の必要性

スクールソーシャルワーカーの支援により問題の一定の解決が図られた場合であっても、再び問題が生じることも少なくない。課題をかかえている子どもを、地域で日常的に見守り、支えてくれる人々とつなぐことが必要。

② コミュニケーション能力や人間関係形成能力の育成の重要性

課題をかかえている子どもは、家庭での養育力、教育力が弱い環境で育つ場合が多く見受けられる。地域の人々とのつながりの中で様々な交流を通して、コミュニケーション能力や人間関係形成能力を育み、学ぶ力・生きる力を身に付けることが重要。

※ このような課題に対する取組みは、大阪市青少年問題協議会（平成 26 年 5 月 28 日開催）の意見「家庭に居場所がなく、非行を繰り返す子どもたちの居場所づくり」にも寄与することができる。

2. 港区サードプレイス事業「エルカフェ」（こどもの居場所づくり）（H27～）

(1) 概要 別紙チラシ「エルカフェ」のとおり

(2) コンセプト 笑顔をつなぐ居場所

笑える、言える、得る、支える・・・様々なエルがある場所

(3) 活動内容 参加する子どもたちが自由に思い思いの時間を過ごせ、ちょっとホッとできるような居場所とする。勉強をしたい子どもには勉強ができるようにする。トランプやオセロのゲームや漫画なども用意する。全体やグループでのアクティビティ等も行う。

(4) スタッフ 活動の担い手は、こどもの居場所づくりの講座修了生（4. 参照）を中心とした「こどもたちの笑顔をつなぐ会」のボランティア。スーパーバイザーは office ドーナツトーク 田中俊英代表。



田中俊英さん: 出版社起業、子ども若者支援 NPO 法人代表 (02～12 年) のあと、2013 年より一般社団法人 office ドーナツトーク代表。支援面では、子ども若者支援 (不登校・ニート・ひきこもり・発達障がい・貧困問題等) と、NPO・行政へのスーパーバイズ・運営コンサルティングを行なう。マネジメント面では、office ドーナツトークの法人マネジメントを主として担当。2003 年、大阪大学大学院「臨床哲学」を修了。主な著書に、『ひきこもりから家族を考える』(岩波ブックレット) ほか。京都精華大学非常勤講師「こころと思想」(2013 年～)。内閣府「困難を有する子ども・若者及び家族への支援に対する支援の在り方に関する調査研究企画分析会議」委員 (2013 年)。

3. 事業実施までの経過

(1) こどもの居場所づくりの講座（大阪大学との協働プロジェクト）

大阪大学との間で平成25年度に締結した覚書に基づき、大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラムの大学院生との協働事業「プロジェクト・ラーニング」の一環で、平成26年度はP4C（こどもの哲学）を使ったこどもにとって必要な居場所について考える連続講座を全4回実施し、居場所づくりに参画するボランティアを養成。（26年6月～7月実施） 受講者のべ77人
（別紙チラシ「阪大生と共に『こどもの居場所』を考えよう！」）

(2) こどもの居場所づくりに向けた準備

① 研修会の実施

(1)の講座修了生とともに、こどもの居場所を実際に開設することとし、サードプレイスとしてのこどもの居場所づくりの具体的な研修会を実施（26年8月実施 受講者18人）

（別紙チラシ「こどもに必要な居場所（サードプレイス）とは～家庭でも学校・職場でもない自由でゆるやかな場～」）

② ボランティアと職員による準備

9月から翌年3月まで、月1回、計6回集まりをもち、こどもの居場所づくりに関する勉強会と開設の準備を進めた。

4. 現状と課題

(1) 居場所（サードプレイス）への参加者について

- ・平成27年4月開始から5回開催。
- ・不登校児童3名、特に課題をかかえているわけではない児童4名がこれまで参加。
- ・事業を知ったきっかけは、広報みなど、チラシ、エルカフェのボランティアの声かけ、教頭先生の誘導等
- ・参加者は小学2～6年生
- ・不登校児童は、保護者もしくは教頭先生と一緒に参加
- ・不登校の中学生の子どもをもつ保護者が見学と相談にこられ、生活困窮者対策の子ども自立アシスト事業*につないだ。

※専門的知識を有する支援員が、子どものいる被保護世帯や生活困窮世帯への訪問を通じて、家庭の抱える課題を把握・分析・診断し、支援することによって親子の進学意識を高め、既存の各種学習支援施策に繋げる事業

- ・不登校以外の課題をかかえている子どもについては、未だ参加していない。
- ・非行傾向のある子どもについては、できる限り早期（小学校時期）に誘導し、ボランティアとの関わりの中で、コミュニケーション能力を育み、非行の予防につなげるべき。

(2) ボランティアについて

- ・事業のボランティアとして登録している人は、約 20 人
- ・多くは、主任児童員、いきいき指導員、青少年指導員、子育て支援サポーター、特別支援教育サポーター、生涯学習推進員、元教員等、子どもにかかわる活動の経験をもつ人々。
- ・若いボランティアが少ない（現在大学生 1 人）。それを補うため、ボランティアが自身の子ども（高校生等）をつれてきてくれているが、今後、学生ボランティアを確保していくことが必要

(3) その他

- ・できるだけ早い時期に月 2 回の実施をめざす。その場合は、相談ニーズをふまえ、1 回は平日の開催としたい。